

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381080

研究課題名(和文) 昼間定時制高校における協同学習を軸とした組織的授業改善の実証的研究

研究課題名(英文) Research on improvement of classroom teaching in daytime and part-time high school based on cooperative learning.

研究代表者

高旗 浩志 (TAKAHATA, Hiroshi)

岡山大学・教師教育開発センター・教授

研究者番号：20284135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：協同学習の理念と技法を軸として組織的な授業改善に取り組む昼間定時制高校を対象に、その有効性と可能性と限界を含めた検証をフィールドワークに基づいて行った。その結果、次の5つの研究課題を明らかにした。協同学習に対する教員間の合意形成に関する課題、協同学習の技法の導入と教師の授業観ならびに授業方略に関する課題、「授業」と「授業中の対人関係」に対する積極性/消極性に基づいた生徒特性の4類型の確定、の生徒特性に対応した授業方略の課題、他校にも一般化可能な校内研修モデルの提示。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the availability, possibility, and limitation of the ideas and techniques on cooperative learning in the daytime and part-time high school. I participated in "K" high school as an advisor and a field-worker, and tried to clear and support teachers' effort for improving their classroom teaching. The major findings are as follows: 1) There is a difficulty that all teachers agree with the concept and technique of cooperative learning. 2) A way of thinking of the cooperative learning may conflict with the way of thinking of each teachers' strategy or concept on the class. 3) I can classify students in four types based on the positiveness and passiveness on class and personal relationships. 4) There are problems in teaching strategies according to student's type. 5) I would like to propose the widely usable models and concepts for lesson study in daytime and part-time high schools.

研究分野：社会科学

キーワード：昼間定時制高校 協同学習 授業改善 校内研修 学校改善

1. 研究開始当初の背景

(1) 定時制高校をめぐる現状と課題

学校基本調査によると、平成 23 年度から過去 10 年の間、定時制高校在籍者数は一貫して 10 万人を超えていた。公立高校に限れば、定時制高校在籍者の比率はわずかに 4.8%であるが、この数値は増加傾向にあった。設置形態別に見ると、夜間在籍者数の急激な減少（約 20,000 人減）に対し、「昼」「昼夜併置」「昼夜」を併せた在籍者数は実に 26,000 人も増加している。修業年限 4 年の定時制高校が 154 校減少（うち 113 校は平成 20 年度以降に集中）した一方、修業年限 3 年の定時制高校は 19 校の増加であり、全体として 1 校あたりの在籍者数は 121.4 人から 147.9 人に増加した。学科別に見ると、普通科在籍者数が約 66.0%の水準で推移しているのに対し、総合学科在籍者数は 1.4%から 12.2%へと急増し、逆に実業科在籍者数は大幅に減少している。総じて定時制高校の中では「昼間」「3 年制」「普通科／総合学科」に在籍する者が増えつつある。その結果、定時制高校の従来の独自性（働きながら学ぶことを前提に、多様な年齢・学校歴・学習歴・学習ニーズをもつ生徒を受け入れること）は相対的に薄まり、「全日制普通科／総合学科の代替」という社会的な役割期待、並びに自己規定が強まっていた。すなわち定時制高校は、多様な学習歴と学習ニーズをもつ生徒を包摂し、その人間形成や学力保障を担う場として自らを再定義している。この変化は同時に、定時制高校が自らの授業をめぐる組織的実践力や内発的改善力を主体的に向上させることを求めていると言える。

(2) 「授業改善の場」としての定時制高校

研究代表者は定時制高校を「教師に抜本的な授業改善の機会を与える場」と捉えている。なぜなら、多様な学習歴や学習ニーズをもち、一般的かつ学校的な一斉授業形式を受け付けにくい生徒を前に、こうした生徒が育ち得る「教育の論理」を個々の教師が見出し、これに基づいた人間形成と学力保障を果たす授業改善が必要だからである。このように「教師の授業改善の場」として定時制高校に注目している点が、先行研究と大きく異なっている。先行研究の多くは「生徒」に視点を置いている。たとえば、定時制高校が吸収する生徒の社会階層の歴史的変容を検証したり（片岡 1983）、教育臨床的課題を抱える生徒を包摂するという社会的機能を明らかにしたり（高口 1993）、正統的学校文化に対する生徒たちの抵抗と心理的葛藤を描いた研究（太田ほか 2009）等である。また定時制高校の現場でも、社会状況に主体的に応じたミッションの再定義（魅力づくり・特色づくり）に努める一方、生徒の多様化に伴う教育困難という現実、自らを「全日制高校の受け皿・セイフティネット」と捉えざるを得ない「揺らぎ」を抱えている。しかし、定時制高校を高校間格差構造の底辺に位置付けた

り、そこに集う生徒に焦点を当てたりするだけでは見えてこない現実がある（城所・酒井 2006）。そのひとつが「教育困難を抱える定時制高校は、教師に抜本的な授業改善の機会を与えている」という「事実」である。この現実に丁寧寄り添い、教師集団の自発的・組織的な授業改善の過程を捉え、個々の教師の指導観、生徒観、並びに授業スタイルの変容にまで踏み込んで、その成果と課題を明らかにした先行研究は見当たらなかった。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、協同学習の理念と技法を採り入れた授業改善に取り込む昼間定時制高校（K 市立 K 高校）を対象に、その有効性・可能性と限界とを含めた検証をフィールドワークに基づいて行うことを目的とした。K 高校は昼間部普通科と夜間部商業科を併設する市立の定時制高校であり、平成 27 年度現在の在籍者数は 119 名である。県立高校のほぼすべてが入試を行う第 I 期には入試を行わず、第 II 期のみ入試を行っている。それゆえ多様な特性をもつ生徒が入学している。授業中の姿勢や学習に向かう態度、中学校までの教育内容の習得状況、家庭の実態や本人の生活状況・生活習慣等に課題を抱えた生徒が多く在籍している。また、同校の教師たちは「発達障害に起因する困難を抱えた生徒が、他校に比べて比較的多い」という印象を抱いている。

本研究では同校の昼間部普通科を対象を絞った。そして、学校の自律的な組織改善を支える 5 つの要素（課題設定、組織体制の構築、時間確保、意欲喚起、成果検証）に注目し、個々の教師の授業改善と、これを組織の実践知へと収斂させる「教師の協同」が必要であることを、またそこには大きな困難が伴うことを、学校現場の実態に即して明らかにすることを目的とした。なお、研究期間内に明らかにしようとする課題は次の 5 つであった。①授業実践場面の収集・分類・整理に基づき、協同学習の理念と技法の導入をめざす際の課題整理を行い、具体的な年間授業改善計画を構築する。②教師へのインタビューに基づいて、教師の授業観、生徒観、指導観と授業形態・方法との関連を明らかにする。その際、板書、教科書やノート、ワークシート等の外形的ツールに目を向け、その活用実態を「記憶を促すためか／思考を深めるためか」「作業的・ドリル的か／学習の深化を促すものか」という視点で類型化し検証する。③生徒を授業と対人関係への積極性／消極性及び学力との関連を含めて類型化する。④③の類型と教師の授業形態との対応関係を検証し、授業形態と学力形成のありかたを明らかにする。⑤K 高校の校内研修の方法を「自律的な組織改善を支える 5 つの要素（課題設定、組織体制の構築、時間確保、意欲喚起、成果検証）」に照らして検証し、他校にも一般化可能な校内研修モデルを提示する。

3. 研究の方法

K市立K高校の授業場面をフィールドワークにより収集し、その分類・整理を行うとともに、協同学習の理念と技法の導入をめざす際の課題整理を行い、具体的な授業改善計画を構築した。また、この計画の妥当性と課題を検証するにあたり、個々の教師の改善努力とその共有・検証過程、並びに学習集団の変容の実態に対する観察とインタビュー調査を行った。

まず、授業実践場面に対するフィールドワークでは、日々の授業で教師が取り組んでいる具体的な工夫とその成果並びに課題と限界を析出した。具体的には座席配置、単元目標及び本時の目標の提示、学習課題と学習活動の展開計画の明示（学び時計の提示）といった生徒への働きかけに注目しつつ、現状の授業実践の実態をあるがままに収集・分類・整理し、K高校に特有の授業実践文化を明らかにした。

また、授業観察と並行して、K高校の教師へのインタビューを行った。自らの授業実践への自己評価や、協同学習の理念と技法に対する見解を収集した。その際、個々の教師の経験年数を踏まえ、過去の勤務校での経験とK高校での実践の相違点等を比較させた。インタビューは原則としてオープンエンドとしたが、次の事項は必須の質問項目として設定した。すなわち、①自らの授業に手応えを感じられたケース／感じられなかったケースは何か、②手応えを感じた／感じられなかったのは、どのような生徒の反応に依るものであったか、③手応えの有無に係る根拠を、生徒の学習意欲や学力に求めるのではなく、自らの授業実践上の課題として整理した場合、どのような言葉にまとめることができるか、といった事項である。

上記の調査で得られた知見等を踏まえつつ、試行的に作成した「教師の協同」を促す校内研修モデル」及び「協同学習実践力自己診断シート」については、K高校の年間授業改善計画に則ってアクションリサーチ的に適用した。

4. 研究成果

上記「2. 研究の目的」に記載した本研究の5つの課題に即して、本研究の成果を整理する。

(1) 課題①及び②について

協同学習に対するK高校の当初のニーズは「一斉授業形式の授業では生徒の学習意欲を高めることが困難」なため、これに置き換わる技法として「学び合い」や「協同学習」を採り入れようというものであった。したがって、授業や生徒に対する教師自身の考え（実践知）を組み替える必要は、必ずしも十分に意識されていなかった。K高校でのフィールドワーク、とりわけ授業の参与観察を通して、発表者が得た知見は次の通りである。

①生徒たちは一斉授業形式への忌避感や不適応感情が強いにも関わらず、同時に強い依存傾向（＝授業とは先生に教わるもの）も示している、②K高校の教師は、生徒がついてこられるように「配慮」して課題の難易度を極端に下げたり、板書の転記やワークシートの穴埋め等、作業的課題が中心の一斉授業形式を採用したりすることが多い、③それゆえに教師の指示と規制が先行し、結果として生徒を「おとなしく教えられる客体」に追い込んでいる、④また授業に対する生徒の「内心の参加度」よりも、「表面的な落ち着き」を授業規律として優先させている、⑤その結果、強権的なルール（教師の警告の回数によって当該授業を欠課扱いすること等）によって授業規律を保とうとする「指導」が常態化している、⑥こうした措置が「必要悪だとは思いますが、しかし必要不可欠である」と、教師たちは消極的に正当化している、⑦しかしこのような措置を講じても、実際には授業中の逸脱行動や無関心を決め込む態度は頻発しており、現実には必ずしも授業規律が保てているわけではなかった。こうした状況で、「技法」としてのみ協同学習の方法を導入することは大きなリスクを伴うことが明らかとなった。教師が明確な理由と根拠をもたないまま、拙速に活動主体の時間や場面を設けると、かえって授業規律を保てなくしてしまうからである。

(2) 課題③及び④について

まず課題③について、授業中の生徒を下表の通り4類型して捉えた。

		授業に対して	
		積極的	消極的
対人関係において	積極的	【TYPE 1】 一見騒々しく私語をしたりヤジを飛ばしているようにも見えるが、授業に関連のある発言が比較的多く含まれており、他者と関わりながら学習を進めているタイプ。もしくは学習意欲/対人関係ともに高い両立タイプ	【TYPE 2】 他人に対して積極的に関わるが、それが授業とは関わりがないことが多く、「ちょっとかいを出す」行動が目立ち、授業妨害的な発言や行動が多く見られるタイプ
	消極的	【TYPE 3】 与えられた課題には比較的熱心に取り組んでいるが、他者と関わろうとする態度や授業中の発言がほとんど見られず、黙々とこなしているタイプ	【TYPE 4】 授業中の発言や他者と関わろうとする意欲・態度がほとんど見られず、居眠り等の状況が続いているタイプ

K高校の教師は、上表の各セルに複数の生徒が存在することを前提に授業をしなければならない。そのような状況下で「協同学習」や「学び合い」に係る授業の技法がK高校の教師達にどのように捉えられていたか検証した。まず、「コの字型」の座席配置については、「授業中に発言の少ない生徒（TYPE 3や4）にとって、他の生徒と関わったり、互いの表情が見えることで安心できたりするという点では、一定の効果があった」ものの、「多くの生徒にはあまり関係が無く（コの字にしなくても、授業中の発言（私語を含む）はもとから活発であった）、教師にとっても

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①高旗 浩志, 授業の臨床研究 (カンファレンス) と協同学習, 協同と教育, 査読無, 12巻, 2017年, 5~10頁

[学会発表] (計6件)

- ①高旗 浩志, 協同学習に対する教師の実践知の変容 -昼間定時制高校に勤務する教師へのインタビューを中心に-, 日本協同教育学会第13回大会, 平成28年11月5日(土), 三重大学(三重県・津市)
- ②高旗 浩志, 教師の実践知・経験知を言語化し継承する -「学習する主体」を育むための実践技法とその考え方の読解-, 日本協同教育学会第12回大会, 平成27年10月17日(土), 久留米大学(福岡県・久留米市)
- ③高旗 浩志, 昼間定時制高校における「教師の協同」の実証的研究 -インタビューに現れた教師の授業観を中心に-, 日本協同教育学会第10回大会, 平成25年12月1日(日), 札幌大学(北海道・札幌市)
- ④高旗 浩志, 協同学習の理論・実践・技法の架橋を考える, 日本協同教育学会第10回大会, 平成25年11月30日(土), 札幌大学(北海道・札幌市)
- ⑤高旗 浩志・藤原敬三, 意識調査から見る初任期教員の現状と課題, 日本教師教育学会第23回大会, 平成25年9月16日(日), 仏教大学(京都府・京都市)
- ⑥高旗 浩志・藤原敬三, 初任期教員対象の授業力向上支援プログラムの研究開発, 日本教師教育学会第23回大会, 平成25年9月15日(土), 仏教大学(京都府・京都市)

[図書] (計1件)

- ①高旗 浩志, ミネルヴァ書房, 新しい教職概論-教師と子どもの社会- 第2章 授業をつくる教師, 2016, 236(担当17~32頁)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
高旗 浩志 (TAKAHATA, Hiroshi)
岡山大学・教師教育開発センター・教授
研究者番号: 20284135

(2) 研究分担者
()

研究者番号:

(3) 連携研究者
()

研究者番号:

(4) 研究協力者
()